

研究概要報告書【音楽振興部門】

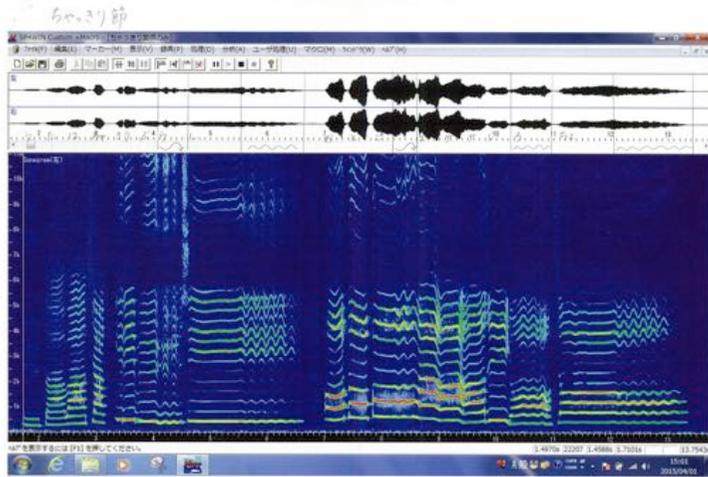
(1/4)

研究題目	伝統的な歌唱を稽古する子どもの歌い方の分析 ―学校教育における歌唱モデルの構築に向けて―	報告書作成者	長谷川慎
研究従事者	長谷川 慎(研究申請者) 志民一成(共同研究者)		
研究目的	<p>本研究は、日本の伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの唄い方について、発声やコブシ、唄う高さ(調子)を分析し、学校教育において子どもが伝統的な歌唱を唄う際のモデルを構築していくことを目的とした。平成 20 年に改訂された現行の学習指導要領(小・中学校)においても、我が国の伝統的な歌唱の取扱いは改訂の柱と位置付けられており、現在の学校音楽教育において、とくに注目されている今日的な課題である。</p> <p>そこで本研究では、比較的小子どもの学習者の多い首都圏、京都、札幌を中心として能の謡や、長唄や箏曲等の近世邦楽、民謡などの伝統的な歌唱の稽古を受けている子ども(小・中学生)の音声を収集し、発声や唄う高さ(調子)、唄い方などについて音響分析を行った。音響分析にはスペクトログラムやピッチ検出、パワー測定などを用い、表声や裏声の使い分けやフォルマントなど声の音色の特徴についても検討した。さらには、またコブシや節回しなどの唄い方については楽譜化するなどし、大人の歌唱との比較を行うことを目的とした。</p> <p>本研究の成果として、日本の伝統的な歌唱を授業で扱う際、どのような高さ(調子)で導入したらよいか、また、どのような発声を目指したらよいか、さらには、コブシなどの装飾的な旋律をどう扱えば良いかについて、モデルを提示した。これにより、子どもの発達段階や成長の実態に即した歌唱指導が可能となり、また、具体的なモデルが示されることで、子どもにとって身近な模範となるばかりでなく、教師にとっても指導の目標が具体化され、さらには評価の規準の明確化にもつながることが期待される。それによって小・中学校で日本の伝統的な歌唱の活動が、より活発に行われるようになり、その質の向上にもつながると考える。</p>		

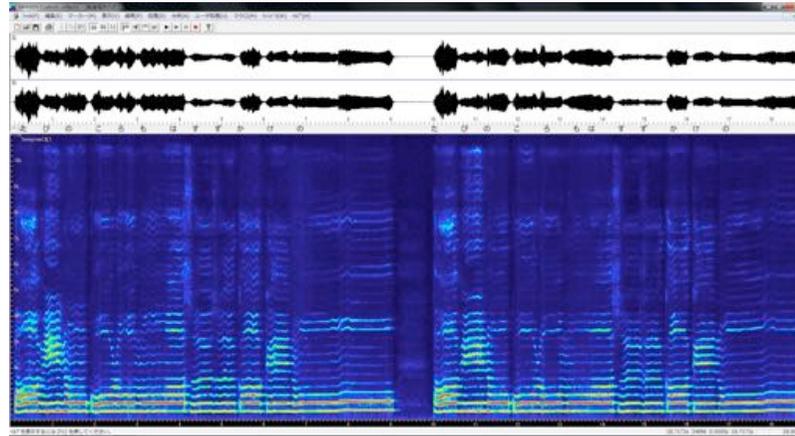
研究内容	<p><研究の方法></p> <p>本研究は、平成26年8月から平成27年3月にかけて実施した。</p> <p>主に静岡大学G102スタジオに被験者となる民謡、箏曲を学習する子どもと大人(師匠等)を招き音声を収録した。なお、長唄を学習する子どもの歌については被験者の都合上平成27年4月に入ってから都内で行った。</p> <p>これらの音声を、音声分析ソフトウェア「音声工房 custom+Macro Ver.4.0」(NTTアドバンスドテクノロジー社/以下「音声工房」)を用いて音声の聴取しながら、コブシ(装飾的旋律)が現れている箇所を「音声工房」のスペクトログラムで視覚的に確認した。なお、スペクトログラムとは、スペクトル(ある時点の音声波形を周波数ごとの音の強さに変換したもの)の時間変化を表示できるようにしたものである。</p> <p>民謡については、被験者の範唱音源を用いて小学校での実践を行った。</p> <p><研究の概要></p> <p>民謡の被験者は静岡市内の小学校に通う4年生で、平成25年に開催された「ちゃつきり節日本一全国大会」少年少女の部でチャンピオンに輝いた、門井舞映さんが唄った音源を分析に用いた。門井舞映さんは6歳の頃から民謡を始め、現在も毎週稽古に通っているとのことである。《こきりこ節》《ソーラン節》《ちゃつきり節》を唄ってもらい分析対象とした。</p> <p>長唄の被験者は都内に在住する中学2年生の女子で、実父が長唄唄方として歌舞伎等で活躍している長唄の芸の家柄に育ち、幼少期から長唄に親しんでいる。今回は教科書にも歌唱教材として示されている《勸進帳》の冒頭「旅の衣は～」と「これやこの～」について唄ってもらい分析を行った。合わせて両親からも稽古をする上での心がけ等の聴き取りを行った。</p> <p>箏曲の被験者は中学3年生で幼少時より数々の全国コンクールで優勝の経験をもつ男子であった。器楽教材として教科書に示されている《吉野山》を収録し、同時に箏曲家でもある実母の演奏も収録した。</p> <p>民謡の実践は小学校4校、中学校4校で、門井舞映さんの範唱音源を用いて実践を行った。</p> <p>静岡大学教育学部附属静岡小学校において、4年生で《こきりこ》、5年生では《ソーラン節》を扱ったが、こちらでも門井舞映さんの範唱音源を用い、iPad アプリケーションで範唱の音声波形と自分達の唄声の波形を見比べながら、舞映さんの唄に近づけることを目標として授業を実施した。</p>
------	---

研究のポイント	既に述べた通り、学習指導要領において我が国の伝統的な歌唱の取扱いが重視されてきているものの、未だ実践例は極めて少ない我が国の伝統的な歌唱指導。その原因としては、高度に完成された芸である伝統的な歌唱を、子どもにどう教授していくべきかについて、十分に検討されてきておらず、当然ながら、どう評価すべきなのかも明確にされていないということが考えられる。多くの範唱音源は、名人級の完成された音源であり、児童生徒が目標とするにはかけ離れたものである。本研究は、日本の伝統的な歌唱の稽古を受けている子どもの唄い方について、発声やコブシ、唄う高さ(調子)を分析し、学校教育において子どもが伝統的な歌唱を唄う際のモデルを構築していくことを目的とし、加えて研究を通して得られた子どもによる範唱音源を示せた事がポイントとして挙げられよう。
研究結果	<p>(a)民謡…門井舞映さんの音源では、音域は最低音 Bb3 から最高音 F5 を表声で唄っているのが確認できたが、同じ子どもや女性が唄う調子より幾分高めである。しかし、男性歌手などが唄う調子とは長2度～減5度程度の差があり、男性のオクターブ下で歌うことが常態化している学校音楽での状況においては、混乱を招きかねないという懸念が生じる。コブシ(装飾的旋律)は3曲で合計58ヶ所のコブシを確認できた。最も多かったコブシの種類は「ゆり」で26ヶ所、次に「ゆりさげ」の19ヶ所、最も少なかった「しゃくり」は13ヶ所だった。</p> <p>(b)長唄…師である父の指導のポイントは「まず正確な音程、リズム、テンポで歌う事である」と述べていた事を証明するように、被験者の唄は3点ともに完成された大人の演奏に近いものであった。ポルタメントに声を上げていくところでは、ややテンポが揺れるものの、それが長唄らしさにつながっていた。</p> <p>(c)箏曲…揺れない直線的な発声は箏曲の基本。波形からも師である母の演奏とほとんど変わらない演奏をしていた事がわかった。</p>
今後の課題	今回の一連の調査では、民謡と長唄と箏曲について行ったが、今後は能楽など他の伝統音楽の歌唱についても調査を広げたいと考えている。しかし、調査対象となる子どもの学習者は数が少なく、加えて民謡の被験者門井舞映さんのようにコンクールで全国1位となるような歌唱力を備えた学習者を探すのは難しい。今後は、子どもだけでなく師匠にも同時に聴き取りを行なう事で、伝統的な歌唱を子どもに指導する際の子どもの対する評価をどう捉えるかを明らかにし、学校教育の場にフィードバックしていきたいと考えている。本研究を基礎研究と位置づけて今後も継続して学校教育における伝統的な歌唱の指導のあり方を考えて行きたい。

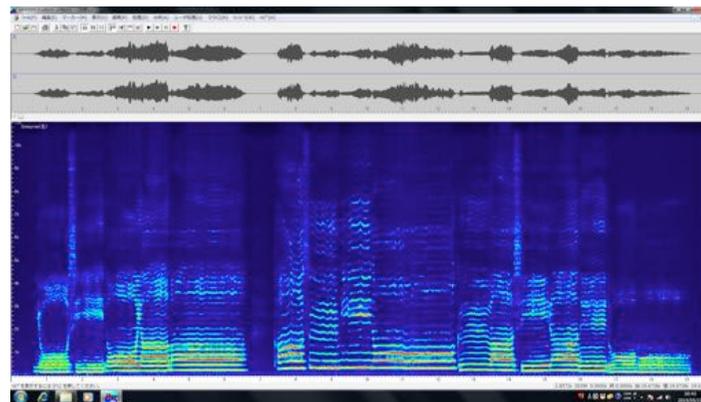
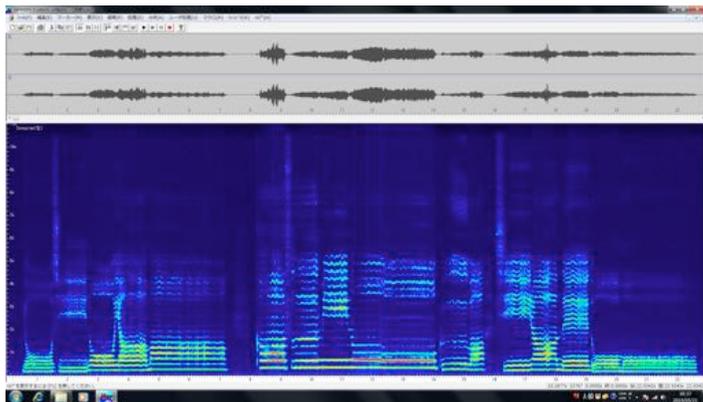
民謡《ちゃつきり節》



長唄《勸進帳》「旅の衣は～」



箏曲《吉野山》(左: 中学3年男子、右: 成人女性)



(注: 写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)